

助教授には、御助言と御指導を頂きました。心より御礼申し上げます。

引用文献

角野康郎 (1989) 日本の水草 その自然史⑦ タヌキモ類の分類と開花・結実をめぐって. 日本の生物 3 (2): 63—68.
北村四郎・村田源・堀勝 (1957). 原色日本植物図鑑草

本編 [I]. pp122—123. 保育社. [改訂53刷 (1984)を参照]

三木茂 (1937) 山城水草誌. pp108—112. 京都府史蹟名勝天然記念物調査報告 第18冊.

山本功人・角野康郎 (1988) 兵庫県南部におけるタヌキモとイヌタヌキモの分布. 植物地理分類研究 36: 72—75.

日本にもコウキクサは分布する

角野康郎

表題を見て奇異に思われた方もあるに違いない。なぜなら、コウキクサ *Lemna minor* L. は、昔から日本のどの図鑑にも載っている植物だからである。ところが、スイスのランドルト博士が1986年に発表した世界のウキクサ科のモノグラフ (Landolt, 1986) で日本には *Lemna minor* は分布しないということになったのである。日本の図鑑によるとコウキクサの特徴のひとつは「葉状体の下面は帯紫色」(大井, 1965; 北村他, 1964) あるいは「根のつけ根周辺に紫紅色または紫茶褐色の斑紋がある」(大滝・石戸, 1980) などとされているが、これは欧米

に分布する *L. minor* にはない特徴で、日本産の「コウキクサ」は新種 *Lemna japonica* Landolt として取り扱われることになった。この新種にはムラサキコウキクサの和名が与えられている。(別府他, 1985)。ランドルト博士によると、コウキクサ (*L. minor* の意味での) とムラサキコウキクサの分布は図1のようで、コウキクサは日本には分布しないことがわかる。

ところで私は、日本のアオウキクサ属を調べながら、ランドルト博士の結論に納得がいかなかった。博士の見解を受け入れ、さらに最近の国内における研究 (別府他, 1985ほか) を考慮にいと、日本には次の6種1亜種のアオウキクサ属植物が分布することになる。

アオウキクサ *L. aoukikusa* Beppu et Murata

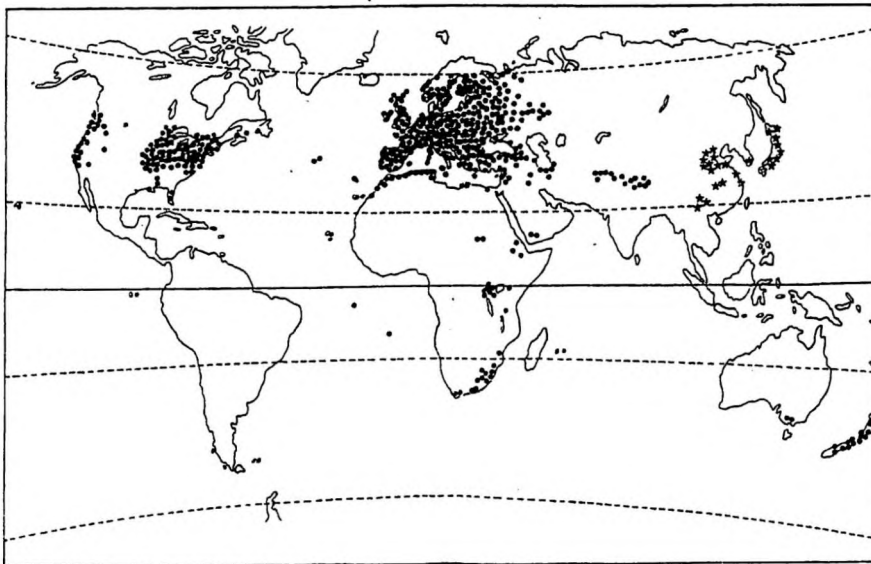


図1. ムラサキコウキクサとコウキクサの分布 (Landolt, 1986による, 転載承認済)。

(●) コウキクサ, (★) ムラサキコウキクサ

ホクリクアオウキクサ *L. aoukikusa*

subsp. *hokurikuensis* Beppu et Murata

ナンゴクアオウキクサ *L. aquinoctialis* Welw.

イボウキクサ *L. gibba* L.

ムラサキコウキクサ *L. japonica* Landolt

ヒナウキクサ *L. minuscula* Herter

ヒンジモ *L. trisulca* L.

しかし、私はこれらのいずれにも該当しないアオウキクサ属植物を各地から採集し、これは *L. minor* に違いないと思いつけてきた。

折しも今年の8月、横浜で開かれた第5回国際生態学会議にランドルト博士が来日されたのを機に、私が観察してきたことを説明し、博士の意見を求めた。その結果、実物を検討したいということになり、早速、神戸近郊で採集した問題の浮草を送っていた。先日、結論としてこれはコウキクサ *Lemna minor* L. に間違いないというご返事をいただいた。こうして日本にもコウキクサが分布することがあらためて確認されたのである。

ランドルト博士によると日本のコウキクサは帰化であろうとのことだが、私は自然分布であると思っている。これは今後の分布調査によって明らかになるであろう。コウキクサの同定は、さく葉標本よりも生品を見るのが確実である。私の手元にある材料であらためて確認できたコウキクサの分布は、中部、近畿、中国の各地方にわたるが、実際には、日本じゅうにあると思う。外国における分布から考えても、東北地方ら北海道には、むしろ普通なのではないか。会員の皆さんには、ぜひ注意していただきたいと思う。

念のため、従来の図鑑のコウキクサに関する記載で間違っている点を訂正しておく。

1 コウキクサの葉状体の裏あるいは根の付け根が紫色を帯びるとするのは誤りである。もし紫色を帯びておれば、それはムラサキコウキクサである。

2 コウキクサが莖芽を作って越冬する(大滝・石戸、1980)というのも誤りである。本当のコウキクサは常緑である。アオウキクサは冬になると消えるので、冬に生育している浮草があれば、コウキクサの可能性を疑ってみる必要がある。むしろ冬から春にかけての季節こそコウキクサをみつける好期である。

コウキクサは葉状体が円形～広卵形で表面には光沢がある。そしてやや厚みがあり表面の中脈上には3個ほどの小突起が認められる。根鞘に翼がないというのもアオ

ウキクサから識別する有力な特徴である。

引用文献

別府敏夫・柳瀬大輔・野淵 正・村田 源、1985.

日本産アオウキクサ類の再検討. 植物分類地理 36 : 45—58.

北村二郎・村田 源・小山鉄夫、1964. 原色日本植物図鑑 草本編 [Ⅲ]. 保育社.

Landolt, E., 1986. The family of Lemnaceae—a monographic study Vol.1. Veroff. Geobot. Inst. ETH, Stiftung, Rubel, Zurich, 71 Heft pp.1—566.

大井次三郎、1965. 改訂新版日本植物誌. 至文堂.

大滝末男・石戸 忠、1980. 日本水生植物図鑑. 北隆館.

【追記】 この原稿を書いた後、11月末に所用で筑波大学へ出かけた。その帰路、土浦市に立ち寄り、霞ヶ浦周辺のハス田に生育する浮草を採集することができた。さて、その浮草であるが、ハスも枯れた初冬にあざやかな緑色のマットを形成して群生していたのは、車窓からの予想どおりコウキクサに相違なかった。これで関東地方にもコウキクサが分布することがあらためて確認できた。

本会報10頁に述べられている新潟県の「アオウキクサ」鈍頭型はハス田に多いとのことだが、私はこれもコウキクサに違いないと推測している。本文中にも書いたが、多くの植物が枯れる冬こそコウキクサを発見する好機である。野外を歩かれるときは、あるいは車窓から、ぜひ“冬も消えない浮草”に注目していただきたい。